

樞密院會議筆記

大正十一年一月二十五日

正

- 一 朝鮮教育令
- 一 臺灣教育令
- 一 千八百八十五年二月二十六日ノ伯林一般議定書並千八百九十年七月二日ノ「ブリュッセル」一般議定書及宣言書ノ改正ニ關スル條約御批准ノ件
- 一 阿弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル條約及議定書御批准ノ件
- 一 開港港則中改正ノ件

国立公文書館 利用上の注意

樞密院會議筆記及び同委員会録は、非公開の席上における発言を記録したものであります。したがって当該発言者の共同著作物と解されますので、引用等発表に際し著作権法上の問題の生ずることのないよう特に御配慮願います。

国立公文書館

分類	
配架番号	2 A 1 - 4 11 486

樞密院會議筆記

朝鮮教育令

一千八百八十五年二月二十六日ノ柏林一般議定書並千八百九十年七月二日ノブダペスト一般議定書及

宣言書ノ改正ニ關スル條約御批准ノ件
阿弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル條約及議定

書御批准ノ件
開港港則中改正ノ件

大正十一年一月二十五日（水曜日）午前十時四十分開議

攝政宮御臨場被為在

出席員

清浦副議長

大臣

高橋內閣總理大臣
四番

内田外務大臣
六番

野田 遞信大臣 十番

顧問官

伊東顧問官

十四番

南部顧問官

二十番

濱尾顧問官

廿三番

穂積顧問官

廿五番

安廣顧問官

廿六番

岡部顧問官

廿七番

一木顧問官

廿九番

久保田顧問官

三十番

井上顧問官

卅二番

平山顧問官

卅三番

石黒顧問官

卅四番

有松顧問官

卅五番

倉富顧問官

卅七番

關席員

山縣議長

皇族

貞愛親王

一番

載仁親王

二番

依仁親王

三番

大臣

加藤海軍大臣 五番

山本農商務大臣 七番

床次内務大臣 八番

中橋文部大臣 九番

元田鐵道大臣 十一番

大木司法大臣 十二番

山梨陸軍大臣 十三番

顧問官

樺山顧問官 十六番

細川顧問官 十七番

九鬼顧問官 十八番

金子顧問官 十九番

都筑顧問官 廿一番

三浦顧問官 廿二番

曾我顧問官 廿四番

黒木顧問官 廿八番

富井顧問官 卅一番

珍田顧問官 卅六番

松岡顧問官 卅八番

委員

齋藤朝鮮總督

朝鮮教育令ニ付

田 臺灣總督

臺灣教育令ニ付

横田法制局長官

馬場法制局參事官

以上各件ニ付

川村拓殖局長官

朝鮮教育令及臺灣教育令
ニ付

山川外務省條約局長

菊池外務省臨時平和條約事務局部長

皆川外務事務官

以上千八百八十五年二月二十六日ノ柏林一般
議定書並千八百九十年七月二日ノコアリユ

ツセル一般議定書及宣言書ノ改正ニ關
スル條約御批准ノ件、阿弗利加ニ於ケ

ル火酒類取締ニ關スル條約及議定
書御批准ノ件ニ付

松本大藏省主税局長

若宮遞信省管船局長

畠山遞信省參事官

廣幡遞信書記官

以上開港港則中改正ノ件ニ付

末松臺灣總督府内務局長

臺灣教育令ニ付

守屋朝鮮總督府參事官

朝鮮教育令ニ付

報告員

濱尾顧問官

朝鮮教育令及臺灣教育令ニ付

二上書記官長

千八百八十五年二月二十六日、伯林一般議
定書並千八百九十年七月三日ノアリニッ

セル一般議定書及宣言書ノ改正ニ
關スル條約御批准ノ件

阿弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル
條約及議定書御批准ノ件

開港港則中改正ノ件
以上三件ニ付

書記官

清水書記官

堀江書記官

議長(清浦)

是ヨリ開會ス

本日ハ

攝政殿下始メテ御臨場ノ下ニ新年

第一回ノ會議ヲ開クコトヲ光榮トス

朝鮮教育令

臺灣教育令

右二件ヲ一括シテ議題トス本件ニ付テハ孰

レモ委員會ノ修正意見アリ先例ニ依リ其ノ

修正シタルモノヲ以テ原案ト為シ第一讀會

ヲ開キ審査報告ヲ求ム

二十三番(濱尾)

今回御諮詢ノ朝鮮教育令及臺

臺灣教育令ニ關シ本官等審査委員ノ命ヲ受ケ
客臘十四日以來數次會同シテ之カ審議ニ從
事シ其ノ間屢國務大臣朝鮮及臺灣ノ西總督
其ノ他當局諸官ノ辯明ヲ聽キ以テ本件二案
ノ查覈ヲ遂ケタリ

抑現行朝鮮教育令ハ明治四十四年八月ノ制
定ニ係リ大正九年十一月一部ノ改正ヲ加ヘ
ラレタルノミナルカ其ノ創定以來既ニ十年
ノ星霜ヲ經各般ノ情況漸ク推移セルニ加ヘ
テ近時ニ至リ事態ノ變遷特ニ著シキモノア

リ當局ニ於テハ此ノ局面ニ適應スヘキ一ノ
施設トシテ右教育令ニ相當ノ改訂ヲ施スノ
必要ヲ認メ曩ニ朝鮮總督ノ配下ニ臨時教育
調査委員會ヲ設ケテ之ニ諮問シ其ノ決議ヲ
裁酌シテ茲ニ本件ノ改正規程ヲ立案シタル
モノナリ又現行臺灣教育令ハ大正八年一月
ノ制定ニ係リ爾來未タ多クノ年所ヲ經ルニ
至ラスト雖其ノ間事情ノ變轉看過スヘカラ
サルモノアリ當局ハ此ノ情勢ニ照シテ事宜
ニ合セムカ為右教育令ノ改訂ヲ企テ之ヲ立

案シタルモノ即チ本件ノ改正規程ナリトス
本件ノ二案ハ孰レモ其ノ形式ニ於テ當該現
行規程ノ全部ヲ廢シテ之ニ代ハルモノニシ
テ其ノ實質ニ於テモ亦幾多ノ重要ナル改訂
ヲ含ム即チ以下各改正案ノ梗概ヲ剖示シ傍
ラ之ヲ現行規程ニ對照シテ其ノ間ノ差異ヲ
解説スヘシ尤モ餘リ長キニ過キムコトヲ虞
レ委員會ニ於テ修正ヲ加ヘタル點其ノ他重
要ノ廉ヲ述フルニ止メム

第一 朝鮮教育令ニ就テ

(一) 本令ハ朝鮮ニ於ケル内地人及朝鮮人ノ
教育ノ要綱ヲ規定スルモノトス(第一條)
是レ現行規程カ專ラ朝鮮ニ於ケル朝鮮
人ノ教育ヲ定ムルモノナリシヲ一變シ
劈頭先ツ内地人朝鮮人間ノ差別ヲ撤廢
シテ兩者ノ教育ヲ同一勅令ノ下ニ規律
スルノ主旨ヲ掲クルモノナリ
(二) 教育ノ種別ヲ普通教育實業教育專門教
育大學教育及師範教育トス本令ハ新ニ
朝鮮人ニ大學教育ヲ為スノ途ヲ開キタ

ルト朝鮮人ニ對スル師範教育ヲ整備シ
タルトニ於テ現行規程ニ一ノ改新ヲ加
ヘタルモノナリ

(三)内地人ノ普通教育ニ付テハ大體ニ於テ
小學校令、中學校令及高等女學校令ニ準
據ス(第二條)朝鮮人ニ普通教育ヲ為ス學
校ヲ普通學校、高等普通學校及女子高等
普通學校トスルコト現行規程ニ於ケル
ト異ナル所ナシ(第三條)本令ハ普通教育
ニ在リテハ内地人ト朝鮮人トニ依リ學

校ヲ區別スルヲ以テ原則ト為スモ特別
ノ事情アル場合ニ於テハ朝鮮總督ノ定
ムル所ニ依リ内地人ハ普通學校、高等普
通學校又ハ女子高等普通學校ニ、朝鮮人
ハ小學校、中學校又ハ高等女學校ニ入學
スルコトヲ得ルモノトシ例外トシテ始
メテ内鮮人共學ノ制ヲ認ム(第二十五條)
而シテ兩種ノ學校ハ其ノ學科及程度ニ
於テ相匹敵スルコトヲ期スルカ故ニ上
級學校ノ入學資格ニ關シテハ普通學校

高等普通學校又ハ女子高等普通學校ノ
卒業者ハ各之ヲ小學校、中學校又ハ高等
女學校ノ卒業者ト看做ス旨ノ規定ヲ新
設ス(第十條)

(四) 普通學校ハ兒童ニ國民教育ノ基礎タル
普通教育ヲ為スコトヲ目的トスルノ趣
旨ニ於テ從前ト異ナル所ナク(第四條)其
ノ修業年限ハ六年ヲ本則トシ土地ノ情
況ニ依リ之ヲ五年又ハ四年ト為シ得ル
コト亦從前ニ同シキモ其ノ入學最低年

齡ハ從前ノ八年ヲ下シテ六年ト為シ新
ニ本校ニ高等科又ハ補習科ヲ置クコト
ヲ得ルノ規定ヲ設ク(第五條)

(五) 高等普通學校ハ男子ニ高等ノ普通教育
ヲ為スヲ目的トスルノ趣旨ニ於テ從前
ニ同シキモ(第六條)其ノ修業年限ハ從前
ノ四年ヲ改メテ五年ト為シ入學資格ハ
從前ノ普通學校第四學年ノ修了程度ヲ
改メテ修業年限六年ノ普通學校ノ卒業
程度トス而シテ本校ニ補習科ヲ附置シ

得ルコト從前ニ異ナラサルモ本校ノ入
學資格ヲ引上ケ其ノ修業年限ヲ延長ス
ルノ結果補習科ノ程度ハ從來ニ比シ著
シク昂騰セラルルモノニシテ其ノ修業
年限及入學資格ハ朝鮮總督ノ定ムル所
ニ依ルモノトス(第七條)

(六)女子高等普通學校ハ女子ニ高等ノ普通
教育ヲ為スヲ目的トスルノ趣旨ニ於テ
從前ト異ナラサルモ(第八條)其ノ修業年
限ハ從前ノ三年ヲ改メテ四年ト為シ入

學資格ハ從前ノ普通學校第四學年ノ修
了程度ヲ改メテ修業年限六年ノ普通學
校ノ卒業程度トシ新ニ之ニ補習科ヲ附
置スルコトヲ得シメ其ノ修業年限及入
學資格ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ルモ
ノトシ(第九條)從前ノ技藝科ニ關スル規
定ヲ廢止ス

(七)普通學校、高等普通學校及女子高等普通
學校ノ教科、編制、設備、授業料等ニ關シテ
ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ラシムルコ

ト從前ト同趣ニシテ(第二十三條)右諸學校ハ官立、公立又ハ私立トシ其ノ公立又ハ私立ニ係ルモノノ設立廢止ニ付テハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケシムルコト亦從前ノ如シ(第二十四條)

(ハ)實業教育、專門教育、大學教育及師範教育ニ在リテハ内地人ト朝鮮人トニ依リ學校ヲ區別スルコトナク内鮮人ノ共學ヲ以テ學制上ノ大趣旨ト為ス而シテ大體ニ於テ實業教育ニ付テハ實業學校令ニ

專門教育ニ付テハ專門學校令ニ、大學教育及其ノ豫備教育ニ付テハ大學令ニ準據スルモノトシ(第十一條及第十二條)師範教育ニ付テノミ別段ノ條項ヲ存ス

(九)師範教育ヲ為ス為師範學校ヲ設ク(第十條)從前内地人ノ師範教育ノ為ニハ師範學校ヲ置キタルモ朝鮮人ノ師範教育ハ僅ニ官立ノ高等普通學校又ハ女子高等普通學校ニ附置シタル短期ノ學科ヲ以テ之ニ充ツルニ止マリシカ故ニ本令

ハ朝鮮人ノ師範教育ニ付現行ノ規程ニ
比シテ一ノ改新ヲ加ヘタルモノナリ
師範學校ノ學科ヲ別チテ第一部及第二
部トシ第一部ハ小學校教員タルヘキ者
ヲ、第二部ハ普通學校教員タルヘキ者ヲ
養成スルヲ以テ目的ト為シ各師範學校
ニ兩部ヲ置クコトヲ本則トシ特別ノ事
情アル場合ニ限リ其ノ一方ノミヲ置ク
コトヲ得シム(第十四條)

師範學校各部ノ修業年限ハ六年トシ普

通科五年、演習科一年トシ女子ニ在リテ
ハ修業年限ヲ五年トシ普通科ニ於テ一
年ヲ短縮ス(第十五條)普通科ノ入學資格
ハ尋常小學校ノ卒業程度トシ演習科ノ
入學資格ハ普通科ノ修了程度又ハ中學
校高等女學校ノ卒業程度トス(第十六條)
師範學校ニハ特別ノ事情アル場合ニ於
テ特科ヲ附置シ又ハ特科ノミヲ置クコ
トヲ得シム(第十七條)特科ノ修業年限ハ
三年又ハ二年トシ其ノ入學資格ハ高等

小學校ノ卒業程度トス(第十八條)

(十) 本令施行ノ期日ハ朝鮮總督ヲシテ之ヲ
定メシム(第二十七條)而シテ當局ニ於テ
ハ本年四月一日ヨリ之ヲ實施スルノ意
向ナリト聞ク

又現行規程ニハ教育ハ教育ニ關スル勅語
ノ旨趣ニ基キ忠良ナル國民ヲ育成スルコ
トヲ本義トシ時勢及民度ニ適合セシムル
コトヲ期スヘキ旨ノ規定ヲ掲ケタルモ本
令ニハ之ヲ存セス此ノ削除ノ理由トシテ

當局ノ辯明セラルル所ハ教育勅語ノ旨趣
ハ學校ニ於テ主要ノ目的トスル德育ノ本
義ニシテ内地ノ教育勅令中ニモ之ヲ掲載
セラレサルノミナラス斯ノ如キ條項ヲ本
令ニ存置スルトキハ往々朝鮮人ノ反感ヲ
買ヒ却テ統治ニ不利ヲ來スノ虞アルカ故
ニ寧口之ヲ削除スルヲ可トスト言フニ在
リ

第二 臺灣教育令ニ就テ

(一) 現行規程ハ專ラ臺灣ニ於ケル臺灣人ノ

教育ヲ定メタルモ、ナルモ本令ハ臺灣
ニ於ケル内地人及臺灣人ノ教育ノ要綱
ヲ規定スルモノトス(第一條)此、改正ノ
理由ハ朝鮮教育令ニ於ケルト同一ナリ
(二)教育ノ種別ヲ普通教育、實業教育、專門教
育、大學教育及師範教育トス即チ本令ハ
現行規程ニ比シ臺灣人ノ為ニ大學教育
ヲ加ヘタルモノナリ

(三)内地人ノ初等普通教育ニ付テハ大體ニ
於テ小學校令ニ準據ス(第二條)臺灣人ニ

初等普通教育ヲ為ス學校ヲ公學校トス
ルコト現行規程ニ於ケルト異ナラス(第
三條)而シテ特別ノ事情アルトキハ臺灣
總督ノ定ムル所ニ依リ内地人ハ公學校
ニ、臺灣人ハ小學校ニ入學スルコトヲ得
シム(第二十一條)又上級學校ノ入學資格
ニ付テハ公學校ノ卒業生ハ之ヲ小學校
ノ卒業生ト看做ス(第七條)

(四)公學校ハ兒童ニ國民教育ノ基礎タル普
通教育ヲ為スコトヲ目的トスルノ趣旨

ニ於テ從前ト異ナル所ナク(第四條)其ノ
修業年限ハ六年ヲ本則トシ土地ノ情況
ニ依リ之ヲ短縮シ得ルコト亦從前ニ同
シキモ其ノ入學最低年齡ハ從前ノ七年
ヲ下シテ六年ト為シ新ニ本校ニ高等科
及補習科ヲ置クコトヲ得ルノ規定ヲ設
ク(第五條)

公學校ハ現行ノ規程ニ於テハ官立又ハ
公立ニ限リタルモ本令ニ於テハ私立ヲ
許シ總テ公學校ノ設立廢止教科編制設

備及授業料等ニ關シテハ臺灣總督ノ定
ムル所ニ依ルモノトス(第六條)

(五)高等普通教育ニ付テハ内地人及臺灣人
ヲ通シ大體ニ於テ中學校令、高等女學校
令及高等學校令ニ準據ス(第八條)是レ高
等普通教育ニ於テ内臺人ノ共學ヲ趣旨
トスルモノニシテ其ノ結果從前ノ高等
普通學校及女子高等普通學校ヲ改メテ
中學校及高等女學校ト為シ其ノ修業年
限ニ於テ高等普通學校ハ一年ヲ女子高

等普通學校ハ二年又ハ一年ヲ加ヘ其ノ
設立ニ付官立公立ノ外私立ヲ認ムルモ
ノト為ル

(六)實業教育專門教育大學教育及師範教育
ニ在リテハ内臺人ノ共學ヲ趣旨トシ大
體ニ於テ實業教育ニ付テハ實業學校令
ニ專門教育ニ付テハ專門學校令大學教
育及其ノ豫備教育ニ付テハ大學令ニ準
據スルモノトシ(第九條及第十條)師範教
育ニ付テノミ別段ノ條項ヲ存ス此ノ點

ニ付注意スヘキ一事ハ現行規程ニ於テ
ハ專門學校ハ官立ニ限リタルモ本令ニ
於テハ此ノ制限ヲ廢シタルコト是レナ
リ

(七)師範教育ヲ為ス為師範學校ヲ設クルコ
ト從前ニ同シキモ(第十二條第一項)從前
ノ師範學校ハ臺灣人ニ對スル師範教育
ヲ目的トシ内地人ニ對スル師範教育ノ
學科ヲ附置スルニ過キサリシニ異ナリ
本令ノ師範學校ハ内臺人ヲ區別セス小

學校教員及公學校教員タルヘキ者ノ養成ヲ目的トス(同條第二項)

師範學校ノ學科ヲ別ケテ小學師範部及公學師範部トシ各師範學校ニ兩部ヲ置クコトヲ本則トシ特別ノ事情アル場合ニ於テ其ノ一方ノミヲ置クコトヲ得シム(第十三條)

師範學校各部ノ修業年限ハ六年トシ普通科五年、演習科一年トシ女子ニ在リテハ修業年限ヲ五年トシ普通科ニ於テ一

年ヲ短縮ス(第十四條)是レ從前豫科一年本科四年ヲ以テ修業年限ト為シタルニ比シ男子ニ在リテハ修業年限ノ通計ニ於テ一年ヲ加フルモノナリ而シテ普通科ノ入學資格ハ從前ノ豫科ト同シク尋常小學校ノ卒業程度トシ演習科ノ入學資格ハ普通科ノ修了程度又ハ中學校高等女學校ノ卒業程度トス(第十五條)

(八)本令施行ノ期日ハ臺灣總督ヲシテ之ヲ定メシム(第二十三條)而シテ當局ニ於テ

ハ本年四月一日ヨリ之ヲ實施スルノ意
向ナリト聞ク

現行規程ニハ教育ハ教育ニ關スル勅語ノ
旨趣ニ基キ忠良ナル國民ヲ育成スルコト
ヲ本義トシ時勢及民度ニ適合セシムルコ
トヲ期スヘキ旨ノ規定ヲ掲ケタルモ本令
ニハ之ヲ存セス此ノ改正ノ理由ニ關スル
當局ノ辯明ハ略朝鮮教育令改正案ニ於ケ
ルモノト同様ナリ

以上陳フル所ニ依リ更ニ朝鮮教育令及臺灣

教育令ノ改正案ヲ比較對照シテ其ノ大略ヲ
述ヘムニ此ノ二令ハ當局ニ於テ彼此斟酌シ
テ立案シタル所ニ係リ其ノ大體ノ結構ニ於
テ相異ナラサルノミナラス其ノ規定ノ條項
ニ於テモ亦相同シキ所少カラサルモ又兩者
ノ間各特殊ノ事情ニ基キテ若干ノ差異ヲ存
スル所アリ今左ニ其ノ主要ナルモノヲ舉ク
レハ

(一)朝鮮ニ在リテハ初等及高等ノ普通教育ニ
付内鮮人ノ共學ヲ行ハサルニ臺灣ニ在リ

テハ初等普通教育ニ付テハ内地人臺灣人
ノ共學ヲ行ハサルモ高等普通教育ニ付テ
ハ共學ヲ行フ朝鮮ニ於テ高等普通教育ノ
共學ヲ不可トスル理由トシテ當局ノ辯明
セラルル重ナル事項ハ(一)内鮮人其ノ國語
力ニ差アリ且歴史慣習思想等ヲ異ニスル
コト(二)両者孰レモ一般ニ共學ヲ欲セサル
ノ傾向アリ為ニ官公立學校ニ於テ必ス共
學ヲ行フトキハ勢ヒ私立學校ニ赴ク者ヲ
多カラシムルノ虞アルコト(三)両者ノ民度

相同シカラサルヲ以テ其ノ學校ノ修業年
限ヲ一律ナラシムヘカラサルコト(二)両者
共學ノ場合朝鮮人教員ヲシテ内地人生徒
ヲ教育セシムルトキハ國民思想ノ養成上
遺憾トスル所少カラス又多數ノ内地人教
員ヲ採用スルトキハ經費ノ増加ヲ來シ且
一部ノ朝鮮人ノ職業ヲ奪フノ結果ヲ生ス
ヘキコト(三)從前内地人學校ト朝鮮人學校
トハ經費ノ負擔者ヲ異ニスルカ故ニ今俄
ニ両者ヲ併合スルトキハ經費負擔ノ關係

ニ付紛糾ヲ生スヘキコト等即チ是レナリ
(二)朝鮮ニ在リテハ高等普通教育ノ為高等學
校ヲ設クルコトナキニ臺灣ニ在リテハ大
體高等學校令ニ準據シテ高等學校ヲ設ク
ルコトト為セリ朝鮮ニ高等學校ヲ置カサ
ル理由ハ當局ノ説明ニ依レハ(イ)朝鮮一般
ノ現況ハ未タ此ノ程度ノ高等普通教育ヲ
要求スルノ域ニ達セサルコト(ロ)從テ強テ
高等學校ヲ設クルトキハ朝鮮ニ在リテハ
或ハ其ノ卒業生ノ前途ニ於テ顧慮スル所

ナキ能ハサルコト(ハ)又朝鮮ニ高等學校ヲ
設クルトキハ内地トノ距離遠隔ナラサル
等ニ因リ專ラ入學ノ目的ヲ以テ内地ヨリ
渡來スル者ノ為ニ本校ヲ利用セラレ且其
ノ卒業生ハ相率ヒテ内地ノ大學ニ趣クニ
至ルノ惧アルコト(ニ)高等學校ノ制ハ普通
教育ニ内鮮人ノ共學ヲ認メサルノ主義ニ
照シ朝鮮ニ於テハ之ニ依リ難キコト(ホ)朝
鮮ニ於テハ大學設立ノ場合寧ろ先ツ大學
豫科ヲ置キテ大學教育ヲ整フルヲ妥當ト

スルコト等是レナリ

(三)朝鮮ノ普通學校及臺灣ノ公學校ハ共ニ修業年限六年ヲ以テ本則トシ朝鮮ニ於テハ之ヲ五年又ハ四年ニ短縮スルコトヲ得ルニ止マルモ臺灣ニ於テハ之ヲ短縮スルノ限度ニ付別段ノ規定ナシ是レ臺灣ニハ尚蕃人兒童ノ為修業年限四年未滿ノ公學校ヲ設クルノ必要アルニ由ル

(四)朝鮮ニ在リテハ師範學校ニ特科ノ制アルモ臺灣ニ在リテハ此ノ制ナシ特科ハ普通

ノ學科ニ比シ卒業ニ至ル年限短ク速成ヲ目的トスル特殊ノ學科ニシテ朝鮮ニ於テ別段ノ必要アルニ由ル

(五)朝鮮及臺灣ニ於テ特別ノ事情アルトキ高等普通教育ノ學校ニ師範學校ノ學科ノ一部ヲ附置スルコトニ關シ之ヲ附置スル學校ハ朝鮮ニ在リテハ官立ノ高等普通學校トスルモ臺灣ニ在リテハ官立又ハ公立ノ中學校又ハ高等女學校トシ而シテ其ノ附置スル學科ハ朝鮮

ニ在リテハ第二部演習科又ハ講習科トス
ルモ臺灣ニ在リテハ小學師範部若ハ公學
師範部ノ演習科又ハ講習科トス是レ兩者
ニ於ケル事情ノ不同ニ由ルモノナリ

(六)朝鮮教育令ニ於テハ總督力準據法タル實
業學校令專門學校令及大學令ニ對シ特例
ヲ設クルコトヲ得ル事項ヲ制限スルモ臺
灣教育令ニ於テハ總督力右諸學校令及高
等學校令ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ得ル
事項ニ付制限ヲ附セサルコトトセリ

之ヲ要スルニ本案改正ノ主眼トスル所ハ形
式ニ於テハ朝鮮又ハ臺灣ニ於ケル内地人ト
朝鮮人又ハ臺灣人トノ學制ヲ併合統一シ實
質ニ於テハ内鮮人又ハ内臺人ノ間ニ或ル範
圍ノ共學ヲ實行シ且朝鮮人又ハ臺灣人ニ對
スル教育ノ程度ヲ引上ケテ成ルヘク内地人
ニ對スルモノト同等ナラシムコトヲ期ス
ルニ在リ而シテ朝鮮又ハ臺灣ノ教育充實ス
ルニ從ヒテ其ノ諸學校ト内地ノ諸學校トノ
間ニ連絡疏通ノ途開カルヘキハ固ヨリ當然

ニシテ此ノ點ニ付テハ關係當局ノ間ニ協議ヲ重ネツツアリト聞ク

按スルニ朝鮮及臺灣ニ於ケル教育ノ施設ハ此等地域ノ統治ニ關スル一大要義ニシテ兩教育令案ハ即チ其ノ根本ノ制定ニ係リ素ヨリ重要ナル法制ニ屬ス而シテ本官等ハ慎重ナル審査ヲ為シタル結果此ノ二案ハ大體ノ趣旨ニ於テ非議スヘキモノナク當局諸官ノ周密ナル注意ニ由リ運用宜シキヲ得ハ其ノ成績不可ナカルヘキモノト思料ス然レトモ

其ノ規定ノ條章ニ至リテハ多少ノ改訂ヲ加フルヲ妥當ナリト為スヘキ所アリ審査委員會ニ於テ修正ヲ可トシタル事項及其ノ理由ヲ述ヘムニ

(一) 二原案トモ内地人及朝鮮人又ハ臺灣人ノ稱呼ヲ以テ兩者ヲ殊別シテ學校ノ系統ヲ規定シタルハ必スシモ適當ナラス蓋シ斯ノ如キ重要ノ法制ニ於テ民族ノ種別ニ依リ待遇ヲ異ニスルカ如キ條項ヲ設クルハ兩者ノ一視同仁ヲ以テ統治ノ要諦ト為ス

ノ趣旨ニ合スルモノニ非サルヘシ且両者
ハ相互ニ轉籍スルノ途ナキニアラサルカ
故ニ之ヲ以テ學校ノ系統ヲ別ツヘキ的確
ナル準繩ト為スコトヲ得ス是レ修正案ニ
於テ内地人ト記シタルモノニ代ヘテ國語
ヲ常用スル者ト記スルコトトシ朝鮮人又
ハ臺灣人ト記シタルモノニ代ヘテ國語ヲ
常用セサル者ト記スコトトシタル所以ナ

リ朝鮮教育令第二條、第三條及第二十五條
臺灣教育令第二條、第三條及第二十一條

(二)朝鮮人ノ女子高等普通學校ハ内地人ノ高

等女學校ニ該當スルモノナルモ朝鮮教育
令ノ原案ニ於テハ女子高等普通學校ハ高
等女學校ト異ナリ修業年限四年ニシテ六
年ノ普通學校ニ接續スルモノハ一種ニ限
リタリ然レトモ内鮮人ノ學制ヲ統一スル
ヲ以テ大要ノ主義ト為スニ拘ラス此ノ點
ニ於テ斯ノ如キ差異ヲ存スルノ避クヘカ
ラサル理由ヲ解シ難ク現ニ臺灣教育令ノ
改正案ニ於テ臺灣女子ニ内地ノ高等女學
校ト同一程度ノ教育ヲ為スノ制ヲ立テタ

ルニ比シテ權衡ヲ失スルノ譏ヲ免レサル
カ如シ且朝鮮女子ノ向學心ハ將來益増進
シ更ニ高キ程度ノ教育ヲ要求スルニ至ル
ヘキコト必然ノ趨勢ナルカ故ニ寧ロ今日
ニ於テ制度上ニハ上記ノ差別ヲ止メ高等
女學校ノ例ニ倣ヒテ女子高等普通學校ノ
修業年限ヲ五年又ハ四年トシ尙土地ノ情
況ニ依リ三年ト為スコトヲ得シノ修業年
限五年又ハ四年ノモノハ六年ノ普通學校
ニ接續シ修業年限三年ノモノハ普通學校

高等科ニ接續スルコトト為スコト是
レ第九條ヲ修正スル理由ニシテ此ノ修正
ニ關聯シテ第十條ニ少許ノ修正ヲ加フ

(三)朝鮮教育令ノ原案ニ於テ師範學校特科ノ
中修業年限二年ノモノニ付テノミ特ニ其
ノ入學資格ノ最低年齡ヲ本令中ニ明記シ
タルハ聊カ不穩當ノ嫌ナシトセサルニ由
リ第十八條第二項但書ヲ削除セリ

(四)朝鮮總督又ハ臺灣總督力準據法タル内地
ノ學校令ニ對シ各其ノ地域特殊ノ事情ニ

依リ特例ヲ設クルコトヲ得ル旨ノ條項ハ
此ノ二令ノ原案ニ於テ相符合セサルモノ
アルモ特ニ其ノ間ニ差異ヲ立ツルノ已ム
ヲ得サル理由アルニ非ス且臺灣總督ニ於
ケルモノハ其ノ委任ノ權限廣キニ過クル
ノ感ナシトセス仍テ兩者ノ規定ヲ適當ニ
整理スルノ趣旨ヲ以テ朝鮮教育令第十一
條及臺灣教育令第十一條ニ修正ヲ加ヘタ
リ

(五)朝鮮教育令第六條及第八條ノ高等普通學

校及女子高等普通學校ノ目的ニ關スル條
項朝鮮教育令第十六條及臺灣教育令第十
五條中ノ師範學校演習科ノ入學資格ニ關
スル條項竝朝鮮教育令第十八條第二項ノ
師範學校特科ノ入學資格ニ關スル條項ニ
於テ字句ヲ轉置増補シタルハ原案ノ趣旨
ヲ明瞭ナラシメムカ爲ナリ

以上諸點ノ修正ハ畢竟原案ノ趣意ヲ一層推
擴シ且其ノ規定ヲ明確ナラシメムトスルモ
ノニシテ即チ内閣ニ於テモ之ニ異議ナキ旨

ノ言明ヲ得タリ

又審査委員會ニ於テ本案審議ノ際特ニ希望
ヲ述ヘテ當局ノ深甚ナル考慮ヲ求ムルコト
ヲ可ナリト認メタル事項ニ點アリ左ニ其ノ
要旨ヲ舉クレハ

(一) 凡ソ教育ノ效果ヲ完カラシムル為ニハ其
ノ施設ヲ充實スルト共ニ之ニ對シテ剴切
ナル監督ヲ施行スルコト當局ノ最モ意ヲ
用フヘキ所ナリトス蓋シ教育ノ事タル諸
般ノ基礎ヲ為シ其ノ效力ノ著大ナルト共

ニ若シ其ノ方法ヲ誤ルモノアルトキハ不
測ノ弊害ヲ醸成シ思想上影響ヲ及ホスコ
ト尠少ニ非スト思料ス這般朝鮮及臺灣ニ
於ケル根本ノ學制ニ重要ナル改正ヲ施シ
自今益其ノ教育ノ擴充ヲ期圖セラるヘキ
カ故ニ新定ノ制度ヲシテ十分ノ成果ヲ收
メシメムカ為當局ニ於テ深クカヲ學事ノ
監督ニ致サムコト本官等ノ希望ニ堪ヘサ
ル所ナリ

(二) 今回朝鮮及臺灣ニ於テ大學ノ制ヲ認メ官

公私立大學ヲ設置スルコトヲ得ルノ途ヲ
開キタル結果萬一中外人ノ經營ニ係ル不
完全ナル私立大學カ官立大學ニ先シテ設
立セラルルカ如キ事アラハ統治上ニ考ヘ
テ甚タ憂フヘキモノアラムコトヲ惧ル即
チ當局ニ於テ其ノ間ニ處スルノ措置ヲ誤
ラサラムコト亦本官等ノ切ニ希望スル所
ナリ

審査委員會ニ於テハ前記ノ修正ヲ附シテ原
案ヲ可トスヘキ旨右希望事項ト共ニ決議シ

タリ

謹テ右審査ノ結果ヲ報告ス

四番(高橋) 只今審査委員長ヨリ説明セラレタ

ル報告ノ末ニ二個ノ希望ヲ述ヘラレタリ即
チ其ノ一ハ當局ニ於テ學事ノ監督ニ深ク力
ヲ用フヘシトノコト其ノ二ハ官公私立大學
ノ設置ニ付其ノ措置ヲ誤ラサル様注意スヘ
シトノコトナリ政府ハ全ク之ニ同意ニシテ
何等異存ナシ茲ニ之ヲ言明ス

二十五番(穂積) 此ノ度御諮詢アリタル朝鮮臺

臺灣ノ兩教育令ハ我帝國ノ殖民政策ノ根本義ニ關係ヲ有シ其ノ重要ナルモノナルコト言ヲ俟タス而シテ民ヲ愚ニシテ知ラシメストノ政策ハ古來往々行ハレタル所ナルカ此ノ案ハ民ヲシテ知ラシメ文化ヲ以テ之ヲ導クノ基礎ノ上ニ立ツモノナリ而モ委員會ニ於テ周密ナル審査ヲ遂ケ適當ナル修正ヲ加ヘラレタルモノナレハ本官ハ一々之ニ賛成シ尚滿場ノ一致ヲ見ムコトヲ希望ス次ニ只今當局ノ注意ヲ促サレタルコトモ亦適切ノ希

望事項ナルカ此ノ點ニ付少シク申述ハタキコトアリ抑人民ヲ教化シ之ヲ指導スルニ當リ之ト同時ニ其ノ教化ノ結果ニ付思ヲ運ラスヘキコト勿論トス即チ民ヲ教ヘ而シテ其ノ教ヘタル結果ニ依リ身ヲ立テ道ヲ行フノ途ヲ設クルコト甚タ肝要ナリ教ヘテ養ハス放ヘテ用ヒサレハ亂ルト云フコト内外政治上其ノ事實ニ乏シカラス本案ハ朝鮮臺灣ニ於ケル教育ヲ頗ル擴張シ獨リ普通教育ノミナラス實業教育專門教育師範教育大學教育

ニ至ル迄充分ニ教育ヲ施サムトスルモノナ
ルカ此ノ實業教育以上ノ諸教育ヲ完成スル
コトニ付同時ニ考慮シ置クノ必要アルモノ
ハ即チ教ヘ而シテ之ヲ用フルノ政策ナリ若
シ之ナクムハ此等高等教育ヲ受ケタル者用
ヒラレサルニ因リ却テ亂民ト為ルノ虞アリ
現ニ印度ノ例ヲ見ルニ千八百八十四五年ノ
頃高等教育ノ為ニ「カルカッタ」及「ボンベイ」ノ兩
大學ヲ設置シ而モ其ノ學科ハ文、理、工、科ノ如
キ實際職業ニ就クニ必要ナルモノヲ選ヒ政

權ニ就クニ緊密ノ關係アル法律政治ノ如キ
モノヲ教ヘサルノ政策ヲ執リタリ故ニ文官
公職ニ就カムトセハ勢ヒ英國ニ留學スルノ
必要アリ又文官試験、文官任用ノ資格ノ如キ
モ印度人ニハ與ヘス英人ニノミ與ヘタリ故
ニ例ヘハ「バリストル」ノ如キ公職ニ就ク資格
ヲ得ムカ為ニハ「ゲムブリッジ」又ハ「オクスフォード」
大學ニ入ルト云フカ如キ狀況ナリキ此ノ
如ク一方ニハ大學ヲ立テタルモ他方ニ於テ
高等教育ヲ受ケタル者ノ職ニ就ク道ヲ設ケ

サリシコト是レ印度ノ今日ノ有様ヲ見ルニ
至リシ所以ナリ余ハ千八百七十五年ヨリ八
年迄英國ニ居リシカ當時高等教育ヲ受ケム
トスル印度人ニシテ英國ニ來ル者多カリシ
モ此等社會ノ上流ニ立チ指導ノ地位ニ當ル
ヘキ人々カ英國ニテ高等教育ヲ受ケ印度ニ
歸リテ職ニ就キ得サルニ因リ不平ヲ抱キ反
對黨ト為ルニ至レリ現ニ余ト同學ノ者ニシ
テ今日ノ印度ノ英國ニ對スル反對思想指導
者ノ一人タルモノアリ此ノ故ニ今回朝鮮臺

灣ニ於テ民ヲ教フルノ高等政策ヲ執ルト同
時ニ其ノ教ヲ受ケタル者ヲシテ道ヲ得シメ
例ヘハ任用上ニ於テ實業教育專門教育大學
教育ヲ受ケタル者ヲシテ充分其ノ所ヲ得シ
ムルノ制度ヲ考ヘ而シテ始メテ此ノ教育令
ノ良案カ美果ヲ收メ得ヘキナリ此ノ點ニ付
テハ當局ニ於テモ遺漏ナク考慮セラルルコ
トト信スルモ印度等ノ先蹤モアルコトナレ
ハ兎ニ角教育政策ト採用立身ノ政策ト相並
行スル様特ニ意ヲ用ヒラレムコトヲ當局ニ

希望シ冗言ナカラ之ヲ夫ノ二個ノ希望條件
ニ附加シ茲ニ本案ニ賛成ノ意ヲ表スル次第
ナリ

十四番(伊東) 本案ハ同列中殊ニ教育問題ニ付
最モ堪能ナル諸君力其ノ審査委員ヲ命セラ
レ爾來數回回ヲ重ネテ慎重審議ノ結果只今
委員長ヨリ詳細報告アリ諸君御聴取ノ通ナ
ルカ更ニ又穂積顧問官ヨリハ印度ノ實例ヲ
引キテノ御高説ヲ承リ本官ハ本案ニ付全幅
ノ賛意ヲ表シ併セテ各位ト共ニ委員諸君ノ

連日ノ勞苦ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表セムトス
希望事項ニ付テハ只今内閣總理大臣ノ御言
明アリ委員諸君ニ於テモ御満足ノコトト信
ス又本案ノ修正事項ハ政府當局ト交渉妥協
ノ結果ニ出ツトノコトナレハ最早論議ヲ須
キス本案ハ讀會省略ノ上全會一致ヲ以テ可
決アラムコトヲ望ム

議長(清浦) 本案ニ付テハ只今十四番ヨリ讀會
省略ヲ以テ採決アリタシトノ希望アリ仍テ
直ニ採決スヘシ此ノ兩案ニ付賛成ノ諸君ノ

起立ヲ請フ

(全會一致可決)

○

議長(清浦) 次ニ

千八百八十五年二月二十六日ノ伯林一般議
定書竝千八百九十年七月二日ノブリュッセル
一般議定書及宣言書ノ改正ニ關スル條約御
批准ノ件
亞弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル條約
及議定書御批准ノ件

右ニ件ヲ一括シテ議題トス本件ハ先例ニ依
リ讀會ヲ省略シテ大體議ニ止メ尚朗讀ヲ省
略シ直ニ審查報告ヲ為サシム
報告員(三上) 謹テ此ノニ件ヲ審查スルニ此ノ

ニ條約ハ大正八年六月以來五大國竝白耳義
葡萄牙及英領五海外殖民地代表者ノ商議ノ
結果同年九月十日サンジエルマン、アン、レ
イニ於テ即チ夫ノ對奧平和條約ノ調印セラ
レタルト同一ノ日及場所ニ於テ此等全權委
員ノ署名ヲ受ケタルモノナリ而シテ此ノニ

條約中第一ノ條約ハ亞弗利加大陸中一定地域ニ於テ通商自由ノ原則ヲ定メ且奴隸制度ヲ禁止シ以テ其ノ地域ノ文化ノ開發ヲ期スルノ目的ヲ以テ國際間ニ締結セラレタルモノ千八百八十五年ノ伯林ノ一般議定書並ニト同一ノ目的ヲ以テ締結セラレタル千八百九十年ノブリュッセルノ一般議定書及宣言書ノ原則ヲ此ノ際更ニ確立シ且右議定書宣言書等ニ規定セル期限ヲ經過スルコト既ニ十數年ニ及ヒ其ノ間關係地方ノ文化漸ク進步

シタルモノアルニ鑑ミ現時ノ情態ニ適應スヘキ規定ヲ設ケムカ為從來ノ議定書宣言書ヲ改正セムトスルモノナリ又第二ノ條約及議定書ハ右ブリュッセル議定書中ニ在ル規定ト同様ニ阿弗利加ノ一部未開地ニ於テ土人ノ福利増進文化啓發ノ為アルコイル中毒ノ危害ヲ防止セムトシ火酒類ノ取引ヲ制限スルノ目的ヲ以テ締結セラレタルモノナリ今此等條約ノ内容ノ要點ヲ述フレハ
第一ノ條約ハ(一)コンゴ河及其ノ支流ノ流

域並太西洋及印度洋沿岸ニ亘ル中部亞弗利
加ノ一定ノ地域内ニ於テ締約國ハ各自其ノ
權力ノ下ニ置カレタル諸地方ニ於テ通商上
完全ナル均等ヲ維持スルノ原則ヲ立テ(二)締
約國ノ國民ニ屬スル商品ハ右地域ニ自由ニ
之ヲ搬入スルコトヲ得其ノ輸出入ニ對シ平
等ノ待遇ヲ與ヘ其ノ通過税ノ免除等ニ關ス
ル規定ヲ置キ(三)締約國國民ハ其ノ身體財產
ノ保護動產不動産ノ取得移轉及職業ニ關シ
右ノ地域ニ於テ所謂國民待遇ヲ有スヘク(四)

各締約國國民ニ利權ヲ付與スル場合ニハ各
締約國間ニ平等ノ待遇ヲ為スヘク(五)締約國
ノ船舶ハ一定地域ノ海岸及河川湖水並ニジ
ル河ノ河川湖水ニ於テ通航寄港及運送ノ
均等ノ自由ヲ有シ尚其ノ船舶ニ付テハ通行
税及通過税ヲ免除セラレ(六)河川湖水ノ補足
タル道路鐵道又ハ傍系運河ハ締約國國民ニ
均シク使用セラレ其ノ使用ニ對シテハ均等
ニ衡平ナル通行税ヲ徵收セラルヘク(七)各國
ハ船舶ノ航運ヲ容易ナラシムル為航行ノ安

全及取締ヲ確保スルニ必要ナル規則ヲ設ケ
又保安上若ハ文化殖民事業上必要ナル制度
ヲ設クルコトノ權利ヲ留保シ(八)各國ハ其ノ
權力ノ下ニ在ル地方ニ於テ身體財産ノ保護
及通商通過ノ自由ヲ保障スルニ必要ナル官
憲ヲ維持スルノ義務ヲ承認シ(九)阿弗利加ニ
於テ權力ヲ行使スル締約國ハ土着人民ノ保
存及其ノ狀態ノ改善ニ注意シ殊ニ奴隸制度
及黑人賣買ノ絶對ノ禁止ヲ確保スルニ努ム
ハク又他ノ締約國國民力土人誘導ノ為ニ設

ケタル宗教學術慈善ニ關スル施設事業並學
術調査者其ノ材料蒐集品ニ對シテハ國籍宗
旨ノ如何ヲ問ハス必要ナル保護ヲ與フハク
又締約國國民ニ對シテ信教ノ自由ト宗教上
ノ勤行ノ自由トヲ保障シ從テ宣教師ノ入國
旅行及居住ノ權利ヲ認メ(十)本條約ノ適用上
紛争ヲ生シ協議ヲ以テ之ヲ解決スルコト能
ハサルトキハ國際聯盟規約ノ規定ニ從ヒ之
ヲ仲裁裁判ニ付スヘキコトト為セリ(十一)前陳
ノ伯林一般議定書及アリウスセル一般議定書

宣言書ハ締約國間ニ於テハ效力ヲ失ヒタル
モノト看做シ(土)將來此ノ條約ニ加入スルコ
トヲ得ル國ヲ制限シ阿弗利加ニ於テ權力ヲ
行使スル國又ハ國際聯盟國タル他ノ國ニシ
テ夫ノ伯林議定書アリユッセル議定書又ハ其
ノ附属宣言書ノ當事國タルモノニ限レリ(土)
締約國ハ本條約實施ヨリ十年ノ後ニ於テ本
條約ヲ修正スル為會合スヘク(土)此ノ條約ハ
成ルヘク速ニ之ヲ批准シ批准書ハ佛蘭西國
政府ニ之ヲ寄託スヘク條約ハ批准書寄託ノ

日ヨリ其ノ寄託ヲ為シタル諸國間ニ實施セ
ラルルモノト為ス尚獨逸國、奧地利國、洪牙利
國及勃爾牙利國ハ各平和條約ノ規定ニ依リ
本件ノ條約ヲ受諾シ遵守スヘキコトヲ約シ
タルモノナルヲ以テ佛國政府ハ本條約實施
後此等諸國ニ對シ本條約ノ認證謄本ヲ送付
スヘキコトヲ定ム
第二ノ條約ノ内容ハ(一)締約國ハ「アルジェリ」
「チュニジ」「摩洛哥」「リビ」「埃及」及南阿弗利加聯
邦即チ南北兩端ノ一定地域ヲ除クノ外全阿

弗利加大陸及其ノ海岸ヨリ百海里以内ニ位
スル島嶼ノ中各自ノ權力下ニ在ル地方ニ於
テハ火酒類ノ取引ニ關シ本條約所定ノ制限
ヲ實施スヘク(二)酒精之ヲ混入シタル酒類及
有害ト認メラルル香料又ハ化學品ヲ含有ス
ル蒸溜酒類ノ輸入、分配、販賣及所持ヲ禁止シ
(三)前陳以外ノ比較的危害少キ蒸溜酒類ニ付
テハ其ノ輸入ハ許スモ之ニ對シテハ一定率
以上ノ高キ輸入税ヲ課シ尚危害少キ此等蒸
溜酒類ト雖火酒類ヲ用ヰルノ慣習ナキ地方

ニ於テハ土著民ニ非サル者ノ消費ニ供セラ
レ且各國政府所定ノ條件ノ下ニ輸入セラル
ル一定量ヲ除クノ外之ヲ禁止ス(四)蒸溜酒類
ノ製造ハ其ノ種類ヲ論セス之ヲ禁止シ又酒
精ノ蒸溜ニ專用スル器具又ハ其ノ部分品ノ
輸入、分配、販賣及所持ヲ禁止シ獨リ伊太利殖
民地ニ於テ多少ノ除外アリ(五)前陳ノ酒類ノ
制限ハ藥用酒精ニ之ヲ適用セス又酒精類製
造用器具ノ中試驗用蒸溜器、科學研究所用器
具、藥劑師用ノモノ及工業用酒精ノ製造ニ必

要ナルモノニ限リ當該地方行政廳ノ許可ヲ
經テ之ヲ輸入、分配、販賣及所持スルコトヲ得
ハク(六)國際聯盟ノ指揮、下ニ特ニ國際中央
事務局ヲ設置シ又締約國ハ年報ヲ公表シ必
要ノ事項ヲ記載スヘキコトヲ定ム(七)締約國
ハ五年後ニ於テ協同シテ本條約ニ必要ナル
修正ヲ加フルコトヲ留保シ(八)締約國ハ阿弗
利加大陸ニ權カヲ行使スル他ノ諸國ヲシテ
本條約ニ加入セシムルコトニ努力スヘキ義
務ヲ規定ス其ノ外本條約ノ適用ニ關スル紛

爭ノ仲裁從前ノ條約ノ效力ノ喪失、本條約ノ
批准及實施、舊敵國ニ對スル關係等ノ條項ニ
シテ第一ノ條約ト同様ノモノヲ掲グ
尚本條約ニ附屬セル議定書ハ本條約ノ實施
ヲ有效ナラシメムカ為其ノ實施前各國ノ執
ルヘキ態度ヲ定メタルモノニシテ即チ本條
約ノ實施ニ至ル迄ノ間ニ或ル締約國力恣ニ
火酒類ノ輸入等條約ノ規定ニ背馳スヘキ行
為ヲ執ルヘカラス之ヲ執ルコトハ締約國ノ
意思及條約ノ精神ニ反スルモノナルコトヲ

聲明セルモノナリ

我帝國ハ本件條約ノ目的タル阿弗利加大陸
ノ諸地方ニ對シ權力ヲ有セス其ノ他何等特
殊ノ利害關係ヲ有セサルモ此等條約ハ國際
聯盟規約第二十二條ニ規定シタル阿弗利加
ノ或ル地域ニ於ケル委任統治ノ精神ニ合致
シ又其ノ實施ニ付國際聯盟ト密接ナル關係
アルハキモノナルニ因リ五大國ノ一タル帝
國力之ニ加入スルハ當ニ然ルヘキ所タルノ
ミナラス又右地方ニ關シ帝國ノ地位ヲ認識

セシムルノ利益アルハシトノ理由ヲ以テ我
全權委員ニ於テ之ニ署名ヲ了シタルモノナ
リト云フ而シテ署名國中英佛白ノ三箇國ハ
既ニ之カ批准ヲ為シタルニ依リ帝國ニ於テ
モ亦之ヲ批准スルノ手續ヲ執ラムトスルモ
ノナリ

要スルニ此等條約ノ内容ニ於テハ別ニ支障
ノ廉ヲ認メス只帝國ノ利害ト相關スルコト
尠キモ今日帝國カ國際間ニ於ケル地位ニ鑑
ミ列國協調ノ旨意ニ從ヒテ之ニ加入スルハ

蓋シ機宜ノ措置タルヘシ即チ帝國ニ於テ此ノ際此ノ二條約及議定書ヲ批准セラルルコト妥當ニシテ本案ハ此ノ儘之ヲ可決セラレ然ルヘシト思料ス

右謹テ審査ノ結果ヲ報告ス

十四番(伊東) 只今議場ニ於テ問題ト為レル兩條約御批准ノ件ノ第一ハ伯林一般議定書並アリユセル一般議定書及宣言書ノ改正ニ關スル條約ニ付テナルカ之ニ對シテハ書記官長ヨリ其ノ沿革内容等詳密ナル報告アリ本

案ハ我國ノ國際的關係ニ於テ當然御承認成ルヘキモノト信ス又第二ノモノ即チ阿弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル條約ハ書記官長ヨリ縷々報告アリタル通阿弗利加ニ於ケル特殊ノ事情ニ基キ土著人民ノ福利増進ト文化啓發トヲ目的トスルモノニシテ帝國ハ阿弗利加ニ於テ特殊ノ利害關係ヲ有セサルモ帝國ノ主要聯盟國タルノ地位ヨリ見テ當然御批准アルヘキモノト思料ス此ノ點亦各位御承認ノコトト思フニ依リ此ノ二案モ

亦前案ノ如ク全會一致ヲ以テ可決セラレム
コトヲ望ム

議長(清浦) 是ヨリ採決スヘシ本案賛成ノ諸君

ノ起立ヲ請フ

(全會一致可決)

○

議長(清浦) 次ニ

開港港則中改正ノ件

ヲ議題トシ第一讀會ヲ開キ朗讀ヲ省略シ直

ニ審査報告ヲ為サシム

報告員(三上) 謹テ本件ヲ審査スルニ從來徳山

今治及真岡ノ三港ハ不開港ニシテ原則トシ

テハ外國船舶及外國貿易ニ從事スル日本船

舶ハ之ニ出入スルコトヲ許サス又此等ノ地

ニ於テ貨物ノ輸出入ヲ為スコトヲ得サリキ

然ルニ近來此ノ三地ノ方面ニ於ケル産業漸

ク發達シテ外國ニ向ヒ又ハ外國ヨリ來ル貨

物ノ出入逐次増加シ而モ一々此等貨物ニ付

最寄ノ開港ヲ經由シテ其ノ輸出入ノ手續ヲ

履行スルノ有様ニシテ之ニ付テハ關係者間

ニ於テ多大ノ不便ヲ感シタルニ由リ關係地
方ニ於テ此等諸港ヲ開港ト為スコトヲ希望
シ既ニ人民ヨリ請願アリ又議會ヨリ建議ア
リタリトノコトナリ仍テ當局ニ於テハ諸般
ノ情況ヲ考慮シ今回本院ニハ御諮詢ナキモ
別ノ勅令ヲ以テ前記三地ヲ開港ニ追加指定
セムトスルニ伴ヒ本案ヲ以テ開港港則第一
條ノ各開港ノ經界ヲ限定スル條項中ニ此ノ
三港ノ經界ノ規定ヲ挿入セムトスルモノナ
リ

要スルニ本案ハ右三港ノ發展ニ伴フ施設ニ
シテ内容ニ於テ更ニ支障ノ廉ナキニ付此ノ
儘之ヲ可決セラレ然ルヘシト思料ス

右謹テ審査ノ結果ヲ報告ス

議長(清浦)

本案ニ付テモ別ニ御異議ナシト認

メ直ニ採決スヘシ本案賛成ノ諸君ノ起立ヲ

請フ

(全會一致可決)

攝政宮御退場

(正午開會)

副議長子爵清浦奎吉

書記官長ニ上島

書記官

清水澄

坂江季雄

朝一

勅令第 號

朝鮮教育令

第一條 朝鮮ニ於ケル教育ハ本令ニ依

ル

第二條 内地人ノ普

通教育ハ小學校令、中學校令及高等女

學校令ニ依ル但シ此等ノ勅令中文部大

臣ノ職務ハ朝鮮總督之ヲ行フ
前項ノ場合ニ於テ朝鮮特殊ノ事情ニ
依リ特例ヲ設クル必要アルモノニ付
テハ朝鮮總督別段ノ定ヲ爲スコトヲ
得

第三條 朝鮮人

普通教育ヲ爲ス學校ハ普通學校、高等

朝ニ

普通學校及女子高等普通學校トス

第四條 普通學校ハ兒童ノ身體ノ發達

ニ留意シテ之ニ體育ヲ施シ生活ニ必

須ナル普通ノ知識技能ヲ授ケ國民タ

ルノ性格ヲ涵養シ國語ヲ習得セシム

ルコトヲ目的トス

第五條 普通學校ノ修業年限ハ六年ト

ス但シ土地ノ情況ニ依リ五年又ハ四年ト爲スコトヲ得

普通學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡六年以上ノ者トス

修業年限六年ノ普通學校ニ修業年限二年ノ高等科ヲ置クコトヲ得

高等科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修

朝鮮三

業年限六年ノ普通學校ヲ卒業シタル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト認めラレタル者トス

普通學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得
補習科ノ修業年限及入學資格ニ關シ
テハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ル

第六條 高等普通學校ハ 生徒ノ身體
ノ發達ニ留意シテ之ニ德育ヲ施シ男
子ニ有用ナル普通ノ知識技能ヲ
授ケ國民タルノ性格ヲ養成シ國語ニ
熟達セシムルコトヲ目的トス

第七條 高等普通學校ノ修業年限ハ五
年トス

高等普通學校ニ入學スルコトヲ得ル
者ハ修業年限六年ノ普通學校ヲ卒業
シタル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ
依リ之ト同等以上ノ學力アリト認め
ラレタル者トス
高等普通學校ニ補習科ヲ置クコトヲ
得

補習科ノ修業年限及入學資格ニ關シ

テハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ル

第八條 女子高等普通學校ハ生徒ノ

身體ノ發達及婦德ノ涵養ニ留意シテ

之ニ德育ヲ施シ女子ニ有用ナル

普通ノ知識技能ヲ授ケ國民タルノ性

格ヲ養成シ國語ニ熟達セシムルコト

ヲ目的トス

第九條 女子高等普通學校ノ修業年限

ハ四年トス

女子高等普通學校ニ入學スルコトヲ

得ル者ハ修業年限六年ノ普通學校ヲ

卒業シタル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル

所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト
認メラレタル者トス

修業年限三年ノ女子高等普通學校ニ

入學スルニ得ル者ハ普通學校高等

等科ノ卒業シタル者又ハ朝鮮總督ノ

定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力

新六

女子高等普通學校ニ補習科ヲ置クコ

トヲ得

補習科ノ修業年限及入學資格ニ關シ

テハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ル

第十條 入學資格ニ關シテハ修業年限

六年ノ普通學校ノ卒業者ハ尋常小學

校卒業者普通學校高等科ノ第一學年

修了者及卒業者ハ各高等小學校第一
學年修了者及修業年限二年ノ高等小
學校ノ卒業者、高等普通學校卒業者ハ
中學校卒業者、女子高等普通學校卒業
者ハ
修業年限四年ノ高等女學校
ノ卒業者ト看做ス

第十一條 實業教育ハ實業學校令ニ依

ル但シ同令中文部大臣及地方長官ノ
職務ハ朝鮮總督之ヲ行フ

實業學校ノ設立
朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ル

第十二條 專門教育ハ專門學校令ニ、大
學教育及其ノ豫備教育ハ大學令ニ依
ル但シ此等ノ勅令中文部大臣ノ職務

ハ朝鮮總督之ヲ行フ

專門學校ノ設立及大學豫科ノ教員ノ

資格ニ關シテハ朝鮮總督ノ定ムル所

ニ依ル

第十三條 師範教育ヲ爲ス學校ハ師範

學校トス

師範學校ハ特ニ徳性ノ涵養ニカメ小

朝鮮ハ

學校教員タルハキ者及普通學校教員

タルハキ者ヲ養成スルコトヲ目的ト

ス

第十四條 師範學校ニ第一部及第二部

ヲ置ク但シ特別ノ事情アル場合ニ於

テハ第一部又ハ第二部ノミヲ置クコ

トヲ得

第一部ニ於テハ小學校教員タルヘキ
者ヲ、第二部ニ於テハ普通學校教員タ
ルヘキ者ヲ教育ス

第十五條 師範學校ノ修業年限ハ六年
トシ普通科五年、演習科一年トス但シ
女子ニ在リテハ修業年限ヲ五年トシ
普通科ニ於テ一年ヲ短縮ス

朝 九

第十六條 師範學校普通科ニ入學スル
コトヲ得ル者ハ尋常小學校ヲ卒業シ
タル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依
リ之ト同等以上ノ學力アリト認めラ
レタル者トシ演習科ニ入學スルコト
ヲ得ル者ハ普通科ヲ修了シタル者中
學校若ハ修業年限四年、高等女學校

ヲ卒業シタル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト認メラレタル者トス

第十七條 師範學校ニハ特別ノ事情アル場合ニ於テ特科ヲ置キ又ハ特科ノミヲ置クコトヲ得

第十四條ノ規定ハ前項ノ特科ニ付之

ヲ準用ス

朝一〇

第十八條 特科ノ修業年限ハ三年又ハ二年トス

特科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ

高等小學校ヲ卒業シ

タル者又ハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト認メラ

レタル者トス但シ修業年限二年ノ特
科ニ入學スルコトヲ得ル者ノ年齢ハ
十五年以上タルコトヲ要ス

第十九條 師範學校ニ研究科又ハ講習
科ヲ置クコトヲ得但シ研究科ハ特科
ノミヲ置ク師範學校ニ於テハ之ヲ置
クコトヲ得ス

朝一

研究科及講習科ノ修業年限及入學資
格ニ關シテハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ
依ル

第二十條 師範學校ニ附屬ノ小學校及
普通學校ヲ置ク但シ第一部ノミヲ置
ク師範學校ニハ附屬小學校第二部ノ
ミヲ置ク師範學校ニハ附屬普通學校

ノミヲ置クコトヲ得

特別ノ事情アル場合ニ於テハ公立小
學校ヲ以テ附屬小學校ニ、公立普通學
校ヲ以テ附屬普通學校ニ代用スルコ
トヲ得

第二十一條 師範學校ハ官立又ハ公立
トス

朝一ニ

公立師範學校ハ道地方費ニ限リ之ヲ
設立スルコトヲ得

第二十二條 特別ノ事情アル場合ニ於
テハ官立ノ高等普通學校又ハ女子高
等普通學校ニ師範學校ノ第二部演習
科又ハ講習科ヲ附置スルコトヲ得

第二十條ノ規定ハ前項ノ高等普通學

校及女子高等普通學校ニ付之ヲ準用

ス

第二十三條 普通學校、高等普通學校、女子高等普通學校及師範學校ノ教科、編制、設備及授業料等ニ關シテハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依ル

第二十四條 公立又ハ私立ノ普通學校、

朝鮮一三

高等普通學校及女子高等普通學校並公立師範學校ノ設立及廢止ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クヘシ

第二十五條 特別ノ事情アル場合ニ於テハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ内地人ハ普通學校、高等

普通學校又ハ女子高等普通學校ニ朝

鮮人

ハ小學校中

學校又ハ高等女學校ニ入學スルコト

ヲ得

第二十六條 本令ニ規定スルモノヲ除

クノ外私立學校、特殊ノ教育ヲ爲ス學

校其ノ他ノ教育施設ニ關シテハ朝鮮

總督ノ定ムル所ニ依ル

附 則

朝一四

第二十七條 本令施行ノ期日ハ朝鮮總

督之ヲ定ム

第二十八條 明治四十四年勅令第二百

二十九號朝鮮教育令ハ之ヲ廢止ス

第二十九條 本令施行ノ際現ニ朝鮮ニ

存スル小學校、中學校、高等女學校、普通

學校、高等普通學校、女子高等普通學校、
實業專修學校、簡易實業專修學校、實業
學校、官立ノ專門學校及師範學校ハ各
之ヲ本令ニ依リ設立シタル小學校、中
學校、高等女學校、普通學校、高等普通學
校、女子高等普通學校、實業學校、專門學
校及師範學校トス

朝 一五

前項ノ高等普通學校、女子高等普通學
校、實業學校及專門學校ハ現ニ在學ス
ル生徒ニ付其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ル
コトヲ得

第三十條 本令施行ノ際現ニ朝鮮ニ存
スル高等普通學校ハ本令施行後二年
ヲ限り仍舊令ニ依ル補習科ヲ存置ス

ルコトヲ得

第三十一條 本令施行ノ際現ニ朝鮮ニ
存スル官立ノ高等普通學校及女子高
等普通學校ハ本令施行後高等普通學
校ニ在リテハ四年、女子高等普通學校
ニ在リテハ三年ヲ限リ仍舊令ニ依ル
師範科ヲ存置スルコトヲ得

朝 一六

第三十二條 本令施行ノ際現ニ朝鮮ニ
存スル私立ノ專門學校ハ當分ノ内仍
舊令ニ依リ存續スルコトヲ得

勅令第

號

臺灣教育令

第一條

臺灣ニ於ケル教育ハ本令ニ依

ル

第二條 内地人

ノ初

等普通教育ハ小學校令ニ依ル

第三條

臺灣人

ニ

初等普通教育ヲ為ス學校ハ公學校ト
ス

第四條 公學校ハ兒童ノ身體ノ發達ニ
留意シテ之ニ德育ヲ施シ生活ニ必須
ナル普通ノ知識技能ヲ授ケ國民タル
ノ性格ヲ涵養シ國語ヲ習得セシムル
コトヲ目的トス

第五條 公學校ノ修業年限ハ六年トス
但シ土地ノ情況ニ依リ之ヲ短縮スル
コトヲ得

公學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年
齡六年以上ノ者トス
修業年限六年ノ公學校ニ修業年限二
年ノ高等科ヲ置クコトヲ得

高等科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限六年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト認メラレタル者トス

公學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得補習科ノ修業年限及入學資格ニ關シ

テハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第六條 公學校ノ設立、廢止、教科、編制、設備及授業料等ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第七條 入學資格ニ關シテハ修業年限六年ノ公學校ノ卒業者ハ尋常小學校卒業者、公學校高等科ノ第一學年修了

者及卒業者ハ各高等小學校第一學年
修了者及修業年限二年ノ高等小學校
ノ卒業者ト看做ス

第八條 高等普通教育ハ中學校令、高等
女學校令及高等學校令ニ依ル

第九條 實業教育ハ實業學校令ニ依ル
第十條 專門教育ハ專門學校令ニ、大學

台 四

教育及其ノ豫備教育ハ大學令ニ依ル
第十一條 第二條及前三條ニ規定スル
勅令中文部大臣ノ職務ハ臺灣總督之
ヲ行フ

第二條及前三條ノ

場合ニ於テ臺

灣特殊ノ事情ニ依リ特例ヲ設クル必

要アルモノニ付テハ臺灣總督列段、
定ヲ為スコトヲ得

第十二條 師範教育ヲ為ス學校ハ師範

學校トス

師範學校ハ特ニ徳性ノ涵養ニ力メ小
學校教員タルヘキ者及公學校教員タ
ルヘキ者ヲ養成スルコトヲ目的トス

第十三條 師範學校ニ小學師範部及公
學師範部ヲ置ク但シ特別ノ事情アル
場合ニ於テハ小學師範部又ハ公學師

範部ノミヲ置クコトヲ得

小學師範部ニ於テハ小學校教員タル
ヘキ者ヲ公學師範部ニ於テハ公學校
教員タルヘキ者ヲ教育ス

第十四條 師範學校ノ修業年限ハ六年
トシ普通科五年、演習科一年トス但シ
女子ニ在リテハ修業年限ヲ五年トシ

普通科ニ於テ一年ヲ短縮ス

第十五條 師範學校普通科ニ入學スル
コトヲ得ル者ハ尋常小學校ヲ卒業シ
タル者又ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依
リ之ト同等以上ノ學力アリト認めラ
レタル者トシ演習科ニ入學スルコト
ヲ得ル者ハ普通科ヲ修了シタル者中

學校若ハ修業年限四年 高等女學校
ヲ卒業シタル者又ハ臺灣總督ノ定ム
ル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリ
ト認メラレタル者トス

第十六條 師範學校ニ研究科又ハ講習
科ヲ置クコトヲ得

研究科及講習科ノ修業年限及入學資

台 六

格ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ
依ル

第十七條 師範學校ニ附属ノ小學校及
公學校ヲ置ク但シ小學校師範部ノミヲ
置ク師範學校ニハ附属小學校公學校
師範部ノミヲ置ク師範學校ニハ附属公
學校ノミヲ置クコトヲ得

特別ノ事情アル場合ニ於テハ公立小
學校ヲ以テ附属小學校ニ公立公學校
ヲ以テ附属公學校ニ代用スルコトヲ
得

第十八條 師範學校ハ官立又ハ公立ト
ス
公立師範學校ハ州又ハ廳地方費ニ限

リ之ヲ設立スルコトヲ得

第十九條 公立ノ師範學校ノ設立及廢
止ハ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

師範學校ノ教科、編制、設備及授業料等
ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依
ル

第二十條 特別ノ事情アル場合ニ於テ

ハ官立州立又ハ廳地方費立ノ中學校
又ハ高等女學校ニ師範學校ノ演習科
又講習科ヲ附置スルコトヲ得

第十七條ノ規定ハ前項ノ中學校及高
等女學校ニ付之ヲ準用ス

第二十一條 特別ノ事情アル場合ニ於
テハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ内地

人

ハ公學校ニ臺灣

人

ハ小學校ニ入

學スルコトヲ得

第二十二條 本令ニ規定スルモノヲ除

クノ外私立學校特殊ノ教育ヲ為ス學
校其ノ他ノ教育施設ニ關シテハ臺灣
總督ノ定ムル所ニ依ル

附則

第二十三條 本令施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二十四條 大正八年勅令第一號臺灣教育令ハ之ヲ廢止ス

第二十五條 本令施行ノ際現ニ臺灣ニ存スル小學校、公學校、中學校、高等女學校

古

校、實業學校、簡易實業學校及師範學校ハ各之ヲ本令ニ依リ設立シタル小學校、公學校、中學校、高等女學校、實業學校及師範學校トス

前項ノ師範學校ハ現ニ在學スル生徒ニ付其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ルコトヲ得

第二十六條 本令施行ノ際現ニ臺灣ニ
存スル高等普通學校及女子高等普通
學校ハ各之ヲ本令ニ依リ設立シタル
中學校及高等女學校トス但シ現ニ在
學スル生徒ニ付テハ其ノ在學ノ間仍
舊令ニ依ルコトヲ得

第二十七條 本令施行ノ際現ニ存スル

臺灣總督府高等商業學校、臺灣總督府
醫學專門學校及臺灣總督府農林專門
學校ハ之ヲ本令ニ依リ設立シタル專
門學校トス

臺灣總督府醫學專門學校及臺灣總督
府農林專門學校ハ現ニ在學スル生徒
ニ付其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ルコト

ヲ得

本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府
商業專門學校ハ現ニ在學スル生徒ノ
卒業スル迄仍舊令ニ依リ存續スルコ
トヲ得

御批准案

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐メル日本國
皇帝(御名)此ノ書ヲ見ル有衆ニ宣示ス

朕大正八年九月十日佛蘭西國「サン・ジェルマン・アン
レー」ニ於テ帝國全權委員ノ亞米利加合衆國
白耳義國英帝國佛蘭西國伊太利國及葡萄牙國
全權委員ト共ニ署名調印シタル千八百八十五
年二月二十六日ノ伯林一般議定書並千八百九
十年七月二日ノ「ブリーユセル」一般議定書及宣言
書ノ改正ニ關スル條約ヲ閱覽點檢シ之ヲ嘉納